

危機の時代とリアリティに基づく言葉（誌上シンポジウム 危機と人間）

著者	吉田 寛
雑誌名	静岡大学情報学研究
巻	19
ページ	43-55
発行年	2014-03-28
出版者	静岡大学大学院情報学研究科
URL	http://doi.org/10.14945/00009224

危機の時代とリアリティに基づく言葉

Risk Society and the Words Based on Reality

吉田 寛

Hiroshi YOSHIDA

静岡大学大学院情報学研究科・准教授

yoshida@inf.shizuoka.ac.jp

1. はじめに

2011年に起こった東日本大震災は、日本社会全体を危機に陥れた。振り返ってみれば、日本社会とは、近代以降を見ても、ペリー来航と開国・維新、関東大震災と東京復興、敗戦と戦後復興、阪神淡路大震災とバブル崩壊、そして2011年の東日本大震災といった、社会の根本を揺さぶられるような危機とそこからの復興、再生の繰り返しである。

そうした繰り返しを私たちはどのように受け止めるべきなのだろうか。災害の度に、社会的な構築物、建造物、社会制度などの器が破壊され、同時にそこで営まれていた私たちの生活と、そこに埋め込まれていた私たちの価値が破壊されたことを私たちは知っている。また、復興において、新しい営みが創造的に再生されてきたことを私たちはよく知っている。大災害は、その都度社会を大きく揺さぶり、社会と、そこで生きる私たちの意識を変えてきたのである。

本稿では、こうした危機に際しての価値の破壊と再建について、これを現代社会における「生の意味」の喪失と再生の問題として捉えなおす。危機とは、本質的には、インフラや所有物といった器の問題ではなくて、その中身と言うべき私たち一人ひとりの生命の問題であり、特に、人間が「ただ生きる」存在ではなく「人間らしく

生きようとする」存在であるなら、その生の意味の問題として捉えることは重要であろう。

まず、危機において生の意味が問われることを、ギデンズらの指摘する現代社会における「存在論的不安」の問題として確認しよう。ついで、危機の現実化である破局からの復興において、どのように生の意味を喪失せず、そこから創造的に再生しうるのかについて、ギデンズの「自己」の再帰的な形成、ソルニットの「災害ユートピア」と復興、アーレントの「母語」をめぐる見解に手がかりを探してみよう¹。そして最後に、ウィトゲンシュタインの言語観を見ながら、この短い考察の要点をまとめたい。

いずれにせよ、扱われているテーマは深く大きな広がりをもつものである。従って、エッセーとしての本稿は、このテーマについての一つの切り口をごく簡単なスケッチとして示す、いわば習作として読んでもらうのがふさわしいだろう。

2. 危機の時代としての現代

現代は危険社会と言われる²。空気中を漂う放射能や微細物質、食品に残留する農薬、私たちの身体のバランスをいわば内部から侵すガンやアレルギー、都市でしばしば発生するテロや暴動、核兵器や偵察衛星、無人機といった軍事

的関与の常在、自由主義社会を根底から揺さぶる金融危機や財政危機、自然環境の悪化や地震などの自然現象に起因する大災害。挙げればきりが無い。こうした危険は、社会とそこで営まれる私たちの生命と生活を常時危機に陥れている。現代を生きるとは、危機の中を生きるということである。

ベックは、こうした状況を、科学技術やそれを支える社会的諸制度の生み出すコントロール困難な見えにくい脅威がグローバルに遍在する「リスク社会」と呼び、現代の人間の置かれた状況を次のようにまとめている。「今日人びとは、多岐に及ぶ、互いに矛盾する場合もある、地球規模のリスクや個人的リスクとともに生きることが求められているのである」（ベック：1994=1997、p.20）。

ここでカウントされている危険は、私たちの生命を危機にさらすだけでなく、私たちの生活における価値や、人生の意味をも危機にさらしている。例えばテロや監視などの暴力の偏在は私たちの自由や安心といった価値を圧迫する。また、自然と身体のバランスが崩れると、やはり私たちの健康や自由、安心といった価値が損なわれ、こうした価値に基盤を置いている私たち一人ひとりの人生の意味を揺るがすだろう。

ギデンズは、現代社会を近代以前の伝統的社会と比較し、ベックの指摘するように、科学技術と社会制度の高度化による合理化と効率化を、ポスト伝統社会としての現代社会の特徴と見ている（ギデンズ：1994=1997、p.112）。こうした危機の認識を踏まえて、ギデンズは、現代社会の安定に関わる問題として、伝統的文脈から切り離された人間の存在論的な不安にどう取り組むかという課題に進む³。ギデンズは、私たちの生存の維持に関わる存在リスクの増大のみならず、自己アイデンティティの維持に関わる論点をも、現代社会の危機の問題として受け止めようとしているのである。

「ギデンズは、秩序問題をこうした存在論的

不安を基盤に体系的に論じている。課題は、環境上の危険要素というよりも、むしろ心的および社会的危険要素に私たちがいかにうまく対処でき、私たち自身のパーソナリティや社会の中に適度な水準の秩序や安定性をいかに維持できるかということにある。」（ラッシュュ：1994=1997、p.217）

こうしたギデンズの課題は、近代的な合理的個人の行動と生の意味を喪失についてのウェーバーの問題意識に通じると言えるだろう。資本家という近代的アクターの行動を、ギデンズはウェーバーを敷衍しつつ、いわば生の意味を喪失した衝動脅迫として描いている。

「資本家は、言うなれば——ひとたび伝統的な宗教倫理を放棄してしまった以上——なぜ、この止まることのない回転ドラムを自分なり他の人びとが踏みつづけていかざるを得ないのかについてほとんど何の認識ももたずに、反復行動を強いられていったのである。」（ギデンズ：1994=1997、p.132）

このような近代における生の意味喪失と反復行動の指摘は、もちろん資本家だけではなく、形式的合理性に従う専門官僚、また彼らの作り出した諸制度から逃れられない労働者や消費者まで、近代的アクターに広く当てはまる。近現代の人間の自己疎外という問題に向けるギデンズのまなざしは、ニーチェ、マルクス、ウェーバーから、実存主義、フランクフルト学派らの現代思想を脈々と形成してきた問題意識から大きく外れてはいない。ただし、特定の権力を悪者として弾劾するよりも、これをモダニティという避けがたい危機的状況として受け止める点では、特にウェーバーに近い印象はある。おそらくそうした事情も反映してギデンズは、既成の権力に対する告発と闘争ではなく、新たな社会制度や政治文化をグラジュアルに構築することで危機を脱し、現代社会において生の意味を

取り戻す方向を模索する。

ギデンズは、こうした現代的自己疎外の状況を「自己の再帰的プロジェクト (reflexive project of the self)」によって乗り越えるというビジョンを提示する (ギデンズ: 1991=2005, pp.5-6)。私たちの直面している危機は、モダニティに伴う自己の「存在論的不安」、あるいは「人格的無意味性の脅威」(上掲書、p.228)である。近代化に伴って、私たちの自己は、その存在論的基盤であった伝統的文脈から放り出されて、商品世界の中で自己の意味を見失いがちである。これに対してギデンズが期待する道は政治である。「解放のポリティクス」と「ライフポリティクス」と彼の呼ぶ、新しい政治文化と社会制度の構築によって、自己とその生の意味の再生を構想するのである。もし政治的に、私たちがさまざまな抑圧から解放され、参加と選択の自由が社会条件として保証されれば、私たちは主体的に社会に参加して自己アイデンティティを形成して自己の生に意味を見出し、こうした存在論的な安心を基盤として社会自体も安定するだろう。危機にある現代社会再生のための壮大なプロジェクトと言うべきだろう。

イギリスのブレア政権 (1997- 2007 年) における「第三の道」と呼ばれるギデンズの関与した現実の政治的挑戦は、ギデンズ自身にとっても自身の理論を実践する具体的な挑戦であった。ただ「第三の道」政策は、先進的な取り組みとして高い期待と評価を受けつつも、さまざまな現実の壁に阻まれながら、2010年の労働党の退陣と共に現実の政治の流れの中に溶解した。労働党の野党転落、そして2011年にロンドンを中心にイギリスの各都市で猛威を振るった暴動は、ギデンズの目論見がイギリス社会で必ずしも十分には達成されなかったことを示している。もし現代社会を危機と見るならば、ギデンズの課題は、課題の見直しも含めて、なお私たちの課題として残っていると言うべきだろう。

3. 「災害ユートピア」と被災地の復興

現代社会自体を危機と見なすギデンズの立場に異論がなくとも、ケーススタディとしてより個別的な危機に目を向けてみることは有意義だろう。2013年現在の日本社会が克服しようと取り組んでいる危機の一つは、やはり2011年の東日本大震災である。震災は、津波によって東日本の太平洋岸の町を破壊して多くの人命を奪い、また、福島第一原子力発電所において原子炉や燃料の暴走と放射能漏れによって、信じられないぐらい広大な国土を汚染して人の住むことのできない地域を作り出した。まさに、未曾有の危機である。

災害という危機に対しては、まず人命救助のフェーズがあり、ついで日々の生活の維持を確保するための復旧のフェーズ、そして人間らしい文化的な生活を回復する、つまり生きる意味に向けての復興のフェーズがある。大災害において、被災した社会は、そして被災者は、かりに生き長らえることを得たとしても、生活と生の意味を支えていた多くを失う。存在論的安心を奪われるのだ。では、被災という危機から、人間はいかにして立ち上がり、そして生きる意味を見出していくことができるのだろうか。

ソルニットは、2011年の震災直前に日本で翻訳出版された『災害ユートピア』という本で、災害という危機的状况において、被災した市民同士が相互に助け合ってきたことを豊富な例を挙げながら指摘している。彼女は「災害ユートピア」を次のように簡潔に説明する。「地震、爆撃、大嵐などの直後には緊迫した状況の中で誰もが利他的になり、自身や身内のみならず隣人や見も知らぬ人々に対してさえ、まず思いやりを示す」(ソルニット: 2009=2011, p.11)。同書では、こうした観点を、1906年のサンフランシスコ地震から2005年のハリケーン「カトリーナ」によって水没したニューオーリンズといった過去の災害の事例から生き生きと抽出して紹介している。

災害前の平常時においては社会的な権力や地

位に基づく秩序が自明視されているがゆえに、人々の相互の助け合いは阻害されている。また、災害が起きてでも従来の自らの権力に固執するのは、幻想にしがみつこうとしてリアリティから遊離し、被災地における協力による復興の敵となる。しかし、災害という危機において、自明視されていた秩序が機能不全になった現実をリアリティとして受け止めた市民たちは、人間本来の本性に従って相互に助け合い復興に参加するというのである。

ソルニットは、こうした市民たちの相互の助け合いを、単なる行動パターンの変更としてだけでなく、行動原理である意識や思想の変化としても捉えている。例えば、2001年のアメリカ同時多発テロ事件（いわゆる9.11テロ）によって、「多くの人の人生が事件により変わった」（上掲書、pp.311-312）ことを紹介している。また、1906年のサンフランシスコ大地震とその後の「災害ユートピア」の連帯を経験したポーリン・ジェイコブソンの言葉も同様である。「新しく生まれ変わったわたしたちの部屋で、たとえ四方の壁がふたたび迫ってきても、きっと二度と以前のような、隣人から切り離された孤独を感じなくてすむだろう」（上掲書、p.201）

1985年のメキシコ大地震に際しては、地震と地震後の危機における「災害ユートピア」の効果が危機の後々まで持続したとソルニットは指摘する。「地震直後の危機は収まっていたが、家族や隣人の救出や、職長の避難場所の確保や、救援隊や清掃グループの編成や、その他多くのことを政府の助けなしにやってきた市民は、自分たちのもつパワーや可能性に対する自信や連帯を失わなかった。地震はメキシコ人が「市民社会」と呼ぶものの再生をうながしたのだ」（上掲書、p.194）。ソルニットによれば、「地震の衝撃は、人びとをPRI（制度的革命党：メキシコ社会を1929年から一党独裁で支配してきた）は不可侵であるという感覚から解き放ったのだ」（上掲書、p.195、丸括弧内は筆者補足）。

災害は、人びとを既成の制度やしきみから投

げ出すことによって、それに支えられていた人びとの生命と生の意味を危機に陥れるが、他方でまさにそれゆえに、幻想から人々の意識を解放し、「災害ユートピア」と呼ぶべき参加と協力による連帯を現出させ、時には新しい生き方と社会を作り出す契機となるのである。いわば、自然災害という外力によって、ギデンズの言う「解放のポリティクス」が一時的に実現したかのような状況が生じるのである。もちろん、外力によって突然に生じた解放だからこそ、それをリアリティとして受け止め、定着させることには困難がある。

私自身が2011年の東日本大震災で体験した災害と復興について語ろう。宮城県山元町は、この震災で多くを失った。町の面積の約40%が津波に流され、家屋の約半数を失い、人口の5%近くの人命を失った。基幹産業であったイチゴ栽培・ホッキ貝漁が壊滅し、頼みの綱と言える仙台への通勤・通学を確保する常磐線まで文字通り根こそぎ破壊された。被災当初からこの町は報道と救助が遅れ、2年半が過ぎた2013年の秋でも、いまだに町内の常磐線は復旧しておらず、不利な状況の中で急激な人口減と高齢化の進行に直面しつつ復興の道を模索している。

私は、日本社会情報学会（JSIS）の仲間らと災害情報支援チームを作り、被災後約3週間たった現地に立った。そこには、破滅の色濃い戦場を思わせるような混乱と絶望が渦巻いていた。私たちは、避難所に情報ネットワークとパソコンを設置して、被災者の利用を支援した。その後津波によって流された後に町内で拾い集められた約70万枚の写真（被災写真）を洗浄してデジタル化し、持ち主や家族に返却する形で「思い出」を救い出す活動に取り組んだ。

その中で、災害前の秩序ではあり得ないような、参加と相互協力の多大なる恩恵を受けた。2011年には、私たちの支援チームは、ボランティアセンター、多くの支援企業、町役場や自衛隊、地元小中学校、地元大学、そして活動している、あるいは活動に理解のある多くの地元

の有志市民と、必要に応じて即座に連携を組むことで支援ミッションを遂行することができた(柴田ほか：2014)。

それは「地獄の中のユートピア」(A Paradise Built in Hell、ソルニット：2009-2011の原題)だったのかもしれない。おそらく被災地のあまりに強烈で大きな必要が、既存の関係から私たちを解放し、現地で活動するアクター同士を共感と信頼、協力の関係に導いたのだろう。そうした中で、行政やマーケットの機能が回復し始め、被災地の状況はすこしずつ改善されていった。活動が長引くにつれ、町の自立的な活動の再生、当初の必要の切迫性の減少、アクター同士の利害関係や各々の体力、考え方などの諸条件の違いなどが現れ始め、直後のユートピア的アナキーから、平常の秩序へと移行していった。馴染みの商店が再開し、役場はいつもの「行政」へ、避難所は元の「学校」へと戻った。

ただし、ソルニットがメキシコ大地震について指摘したように、意識の変化は、ユートピアを経験したアクターたちに残ったに違いない。もちろん、注目すべきは、支援者たちの意識ではなく、まさに被災者として危機をまともに受け止めなければならなかった町の人たちの意識である。

2012年度には、私たちは町役場と協力し、震災で従来の生活圏のつながりを失って仮設住宅で暮らす高齢者を中心とした初心者向けのパソコン教室(「山元復興学校」)を展開した。被災者の人びとに、パソコンを利用して、社会へのつながりと社会参加を再構築するための実践的なスキルと、そのきっかけとなる気持ち、仲間、情報などを提供したいと考えたのだ。パソコン教室には多くの参加者があり、被災地の人びとの復興への強い気持ちを感じるようになった。その参加者らを中心に、翌2013年度には町のパソコン愛好会(「山元パソコン愛好会」)ができ、現在私たち支援者は、この活動を必要に応じてサポートする役割に退いている。パソコン愛好会では、SNSの活用を中心として、

相互の交流、町のイベントへの参加、そして町外への情報発信と情報入手へと活動は広がっている(服部：2014)。

2013年の春、すなわち震災から2年が過ぎたころ、パソコン愛好会の活動として私たちを含む愛好会メンバー全員で町と海を見下ろす高台に取材に出た。私たちは高台から、2年前に町を飲み込んだ、町の東にまぶしく広がっている静かな太平洋を長い間黙って見ていた。町のすぐ外れまでようやく開通したばかりの常磐線を電車が走っているのが見えた。被災した愛好会のメンバーから、誰に語るともなく、「(被災してから)海をはじめて見た」「一人ではぜったい来れなかったねー」「海はきれいだねー」といった言葉がぼつりぼつりと漏れ聞こえてきた。その言葉は重い。その言葉に私は、「3.11」から2年が過ぎたことを改めて嘯みしめ、過去と現在のリアリティを受け止める気持ち、そしてまた連帯と希望の要素を含んだ意識への変化を感じた。復興は、こうしたリアリティのある言葉によってイメージされ、語られ、設計され、そして実現していくべきではないか。

一人のボランティア・研究者として復旧・復興の2年半に参加した個人として、私自身の意識の変化についても語ろう。3.11後、私はまず主にテレビやインターネットといったメディアから災害の情報を得ていた。そこに、支援に駆けつけようとする仲間から連絡を受け、その熱意に動かされた。じっさいに現地入りしてみて、まず地震と津波の圧倒的な力の痕跡に打ちのめされた。そしてそこで被災者が私たちに見せる強さや協力を心で打たれ、同時に彼らの疑いや疲労感に触れた。被災地に滞在する間、私たちが余震や生活の不自由、粉塵や放射能のリスクを、限定的ではあるが共有した。その中で被災地と被災者に共感すると同時に、普段の生活における自分や周囲の意識とのギャップに悩んだ。最後に、活動において自分たちの使命や可能性に酔うことの恐ろしさを体験もした。

こうした体験は、ソルニットに即するなら、

次のように解釈できるだろう。現地入りする前の私の意識は、確かに危機を強く感じていたものの、マスコミ等に依存したいわば危機の幻想の中にあった。しかし、現地において危機のリアリティを感じることで私の幻想は破れ、また、協力できる活動仲間や被災者と共感と連帯感を持つようになった。こうした経過は、ソルニットの提示した「災害ユートピア」の体験をなぞる面があったと言えるだろう。

他方、危機に際しての新たな危機の発生と言うべきかもしれない点もあった。まず、私の「災害ユートピア」意識は、私自身と私を取りまく通常の社会生活の意識との間には大きな隔たりを生んだ。そして、私はその意識の二重化を苦痛と感じたのである。また、私たちの活動が拡大し長引くにつれて、私たちのチームは被災地の人びとと直接に触れる機会の少ない多くの専門的メンバーや一時的メンバーを抱えるようになり、さらには支援チーム内部に完結する語りが増えたことで、チームの内部においてさまざまな「危機」と「支援」の物語が生まれ、時には被災者を忘れた自分本位のヒロイズムの意識が支配的になりそうな状況に気づくことがあった。これは、被災地のリアリティや被災者との連帯意識を離れてしまうという意味では、ソルニットの指摘する、危機に際して権力者らが陥るとされた「エリート・パニック」に通じる面が指摘できるだろう。

さらに、被災地に少しずつ日常が戻りはじめると、再び社会秩序が形成されはじめ、役場や学校、被災者はそれぞれの元の立場に戻る一方で一部は「被災者」として固定され、役場にオーソライズされた私たちは「支援者」へと変化していく過程があった。これはある意味必然であり、復興のための必要なプロセスでもあると言うべきかもしれない。しかしそれに伴って、私を含む支援チームは、そしておそらく被災者もまた、被災直後の解放的リアリティ、共感、連帯感からはだいに遠ざかっていくことになる。それは、自らの活動の存在と継続について

の確信が揺らぐといういみで、もう一つの危機であった。そういうとき、私たちの言葉は、現地で暮らす人々の言葉からも離れ、リアリティを失って宙をさま迷い出そうとしていたのではないか。

こうした危機もまた、ギデンズの指摘するような脱伝統によるのではないが、存在や行為の意味を支える被災後の文脈からの離脱による「存在論的危機」ということができるだろう。こうした生の意味に関わる危機をどのように乗り越えて復興を進めていけるのかは、私たちの活動にとってだけでなく東日本大震災からの復興にとっての社会的課題である。災害とそこからの復興は、生命・生存の危機の克服としてだけでなく、「災害ユートピア」に見られるような共感と参加の形成、そしてその後の存在論的な危機の乗り越えというプロセスとして捉えるべきなのである。そのプロセスの中で、復興に関わる者が自らの存在と活動の意義を失わないためには、その言葉が現地のリアリティを失わないことが必要であると思われた。言葉の意味の問題に考察を移そう。

4. アーレントの危機と「母語」へのこだわり

危機と危機を生き延びた経験を、言葉を持つ思想家が、内在的に、かつ自覚的に語っている事例に目を移そう。アーレントは、現代を代表する政治思想家である。彼女は、ドイツにおいてはハイデッガー、ブルトン、ヤスパースといった当時のヨーロッパを代表する思想家たちに学び、彼らにその才能が大いに期待された存在であった。1933年に政権をとったナチスドイツを逃れてフランスでシオニズム運動に身を投じ、1940年にはさらにアメリカに逃れてそこで政治思想を展開した。アーレントの思想は、公共性と政治参加を支える思想的基盤を与えるものとして、ギデンズの提示した危機を受け止めようとする近年の日本の学界でも広く再評価されているが、他方で、ナチズムに代表される

現代社会における暴力要素の鋭い弾劾者としてもよく知られている。

1964年10月に、アーレントに当時の著名なジャーナリストであるギュンター・ガウスがインタビューした記録は、西ドイツのテレビで翌年放映され、アドルフ・グリム賞を受賞している。これを読むと、アーレント自身の口から、彼女が通り抜けてきた危機について、内在的に語られるのを読むことができる。アーレントは、「ユダヤ人」として、ナチスが政権を獲得するにつれてドイツ国内での生存の危機に直面する。インタビューでは、ドイツ国内での抗ナチス運動への参加とそれが招いたリスク、フランスへの亡命とそこでのシオニズム運動内容などが語られている。その後、アメリカに亡命し、生まれ育った社会とは異なる言語と文化を持つ社会で生きていくことの困難についても語られている。アーレント自身は比較的淡々と語っているが、『アンネの日記』の著者を襲った運命、同時代のベンヤミンの運命やアドルフの経験を見ても、アーレントのたどった人生がいかに危機に満ちたものだったかが推察される。

その中で、アーレントはガウスの次の質問に対して答えている。(アーレント：1994=2002、pp.18-19)

ガウス「……シカゴでお仕事をなさっています。お住まいはニューヨークですね。1940年にご結婚されたあなたのおつれあいも、おなじく哲学教授としてアメリカで活動なさっています。1933年に幻滅された後、現在再び属しておられる学術分野にはいまでは国際的な広がりがあります。それでもお伺いしたいのですが、ヒトラー以前のヨーロッパが二度と存在しないことを寂しくお思いになりますか。ヨーロッパにいらっしゃる際、何が残り何か救いがたく失われたという印象をおもちになりますか。」

アーレント「ヒトラー以前のヨーロッパですか？ 何の郷愁もありません。残ったものですか？ 残ったものは言葉です。」

ガウス「それはあなたにとって重要な意味を持ちますか。」

アーレント「非常に重要です。私は常に意識して母語を失うことを拒んできました。当時うまく話せたフランス語に対しても、今日書いている英語に対しても、私はある程度距離を保ってきました。」

「母語が残った」は、このインタビューの標題とされた発言であり、このインタビューの中でアーレントが危機をどのように生きてきたかを凝縮した言葉となっている。暴力と不条理によってすべてを失っていくかのような中で、母語を手放さなかったことこそがアーレントの人生と思想の意味を支え続けたことだと受け取れるのである。

ただし、このアーレントの発言は、「フランス革命以降の旧大陸の「自殺」とも言える出来事を「破局」として言い換えて」（飯島：2013、p.504）記述しようとする『破局論』の飯島によって、むしろアーレントの弱さ、あるいは狂気として考察されている。すこし寄り道しよう。

上記のインタビューの中で「狂ってしまったのはドイツ語ではないでしょう」（上掲書、p.19）とアーレントは続けている。これについて飯島によると、デリダは「ハンナ・アーレントは狂気が言語に住み着くことができるなどと考えることもできない」（上掲書、p.277）と指摘しており、これを受けて、「同じインタビューになかでアーレントは、アウシュヴィッツが話題になると、これをただちに避けてしまう。母の言語の身体を傷つけることなしに、アウシュヴィッツという[絶対的な悪]と対峙することはできない」と長田陽一（上掲書、p.270）らによって批判されている。彼らは、この言葉がアーレントの、ハイデガーが代表するヨーロッパ近代の知的伝統すなわち精神（Geist）への忠誠であり、要するにアーレントがポストモダンの次元にはいまだ至っていないと言うのである。

飯島自身は別の角度から批判している。飯島

は精神分析的に、アーレントにとっての精神 (Geist) は単にヨーロッパ的知性のことなく、自らの母との狂気をはらんだ関係も投影された「幽霊 (Geist)」であったと言う。

「言葉に狂気がとり憑くということは、アーレントが子供の時に、すでに十分に悟っていたことである。ただ、彼女にはこの上に母までもが本当にいなくなって、たった一人になるのが堪えられないほどに恐ろしかったのである。「母語が残った」というのは、母を信じているという意味ではなく、一人きりになるのが耐えられない、という彼女の本音を転倒させた発言である。」(上掲書、p.281)

「精神 (Geist)」という言葉は、どこか暗い闇にとてもよく似ている。それはまるで人の無意識のようである。それは精神の暗い森だ、と比喩的に言えるのではないか。ハンナ・アーレントがずっと住んでいたのは、そうした暗くて黒い森の中であった。」(上掲書、p.284)

飯島にとって、アーレントの「母語が残った」という言葉は、彼女の狂気からの逃避でなく、狂気への落ち込みを意味している。

しかし、ポストモダンや破局論といった立場からではなく、危機からの再生という観点で見ると、アーレントの言葉はまた別の重みを帯びてくる。アーレントにとってなぜ言葉は母語なのか、そしてなぜ彼女は母語にこだわったのか、それがどうして生の意味の危機を乗り越えることにつながるのか。次の引用 (アーレント：前掲書、pp.19-20) はそれを端的に表現していると思われる。

アーレント「いずれにせよ、ドイツ語は残された本質的なものであり、私も意識していつも保持してきたのです。」

ガウス「最も辛い時期においてもですか。」

アーレント「いつもです。あの辛い時期には、どうするべきかと考えました。狂ってしまった

のはドイツ語ではないでしょう。さらに、母語に代わるものはありません。母語を忘れることはできるかもしれませんが。本当です。私はそれを眼の当たりにしました。その人たちは私よりもうまく外国語を話します。私はいまだに強いなまりがありますし、慣用表現を使えないこともしょっちゅうです。その人たちは皆、そういうことをうまくこなします。けれどもその言葉は決まり文句が次から次へと続くものになるのです。というのも、自分自身の言語にはあった生産力が、その言語を忘れたときに奪われてしまったのです。」

アーレントが母語にこだわったのは、母語でないと彼女が、「決まり文句」を繰り返すのではなく、自分で考えて自分自身を生み出していくために必要だったことなのである。逆に言えば、もしアーレントが、従来からの自分の来歴を忘れ、亡命先のフランスではフランス語に違和感なく暮らし、思考し、ついでアメリカでもまた英語に違和感のない暮らしと思考へと自己を乗り換えてしまうなら、自己を失ってしまうだろうということである。

亡命先には、いわば故国とは異なるゲームがあり、これをプレイすることでしか、亡命者は生きていけない⁴。特に言葉に生きる人間は、まず故国に成立したゲームにおいて自身の言葉が異物とされ、プレイとしての意味を剥奪される。また、亡命先の社会でも、そこで行われているルールに従って言葉を使わなければ、その社会ではプレイとしてカウントされないだろう。だが、そうしたプレイに埋没して、自らの過去を忘れるなら、それまでのゲームにおける一つ一つのプレイがその意味を失うのである。それは自らの現在の存在を過去から支える意味の水脈を枯死させていくことに等しい。こうして思想的・文化的な亡命者には、自己アイデンティティの喪失の問題が強烈に付きまとう。

ただしこの問題は、多くの亡命した作家や思想家、芸術家だけでなく、細かい条件の差異に

目をつぶるなら、故国を離れて生きる人びとのすべてが多かれ少なかれ直面する生の意味の危機でもある。さらに言うなら、東京に出てきた地方の若者、事業に成功した成金、病気や事故、あるいは家族や近親者の喪失などによって生活が一変した者、さらには加齢や過疎、IT化など、グラジュアルだが気がつくに従来の生活が維持できなくなる場合にも、こうした生の意味の喪失といった要素は含まれるだろう。

アーレントは、こうした危機において、「母語」としての自分の来歴、すなわち過去の経験を形づくる言語ゲームを「忘れる」ことを否定しているのである。アーレントにとって、母語を忘れるということは、恐ろしいことである。

ガウス「母語が忘れられている人びとの事例ですが、あなたの印象では、それは抑圧の結果でしたか。」

アーレント「はい、そういうことがとても多くありました。私はそうした人びとに接する体験をして衝撃を受けました。」(上掲書、p.20)

アーレントはこの先、「そうした人びと」については言葉を濁しているが、自分自身にとってそれはアウシュヴィッツを受け止めることの問題だったと述べている。母語を忘れること、それは彼女にとってアウシュヴィッツを信じないこと、そしてアイヒマンになるということである⁵。

多くのユダヤ人を効率的に「処理」したアイヒマンは、一般には悪魔の手先と思われていたが、「事実、＜ナツィ体制の中では例外ではなかった＞という意味では正常だった。ところが第三帝国の状況のもとでは、＜例外者＞のみが＜正常に＞反応しうるものと期待しえたのである」と、アーレントは『イェルサレムのアイヒマン』という本(アーレント:1963=1969、p.21)で指摘している。では、私たちはアイヒマンを責めることはできないと言うのだろうか。「悪魔の手先」といった「決まり文句」でナチズム

を弾劾しないアーレントの文章は当時そうした批判を巻き起こした。だがアーレントの趣旨は、先のインタビューの言葉とアイヒマン裁判の最後の描写に明らかだろう。アイヒマンは絞首台の下で最後に、アーレントの言葉では「陰惨な喜劇性」を持った、演説を残している(上掲書、p.195)。

「『……。ドイツ万歳、アルゼンチン万歳、オーストリア万歳！〔この三つの国は私が最も緊密に結ばれていた国だった。(独)〕これらの国を私は忘れないだろう。』死を眼前にしても彼は弔辞に用いられる決まり文句を思出したのだ。絞首台の下で彼の記憶は彼を最後にぺてんにかけてのだ。彼は＜昂揚＞しており、これが自分自身の葬式であることを忘れたのである。」

アーレントは、アイヒマンが最後の演説で忘れていたのは、自分自身であると考えている。アイヒマンのこうした態度ゆえに、アイヒマンは生の意味が問われるまさにそのときにさえ、「決まり文句」しか出てこないのである。また、アイヒマンの人生自体が、いわばそのような紋切り型の＜成功＞という価値観の繰り返しによってホロコーストの推進に励んだのだ、と指摘する(上掲書、p.99)。

アイヒマンの最後の言葉はドイツ語である。しかし、アーレントは、この文脈ではアイヒマンの「母語」による語りとは認めていない。アーレントの耳は、アイヒマンの言葉を、創造性のかげらもない「決まり文句」しか語り出せない偽りの言葉と聞いたのである。従ってアーレントの言う「母語」とは、単にドイツ語、日本語ということではなく、自らの来歴を背負った自らの言葉という意味と採らなければならない。

アーレントが、弾劾しているのは一小役人アイヒマンだけでなく、ナツィ体制の中で＜正常＞に生きた人びと、そして現在でもなお「母語を忘れ」、言葉の意味を喪失したままに生きている一人ひとりの態度である。私たちは、その

都度の状況に合わせるだけでなく、自らの過去の来歴を、それが「暗い森」のような陰鬱なものであったとしても、忘れずに引き受けていく必要がある。それが「決まり文句」による意味の枯渇と暴力への加担を避け、新しい状況下で生産的に生きるために、アーレントが示す道である。

5. 言葉とリアリティ

ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』は、第一次大戦の激戦下の戦場という危機的状況の中で執筆された。

ウィトゲンシュタインもまた、ドイツ第三帝国から逃れてイギリスに亡命した亡命ユダヤ人の一人であり、生涯母語に強くこだわった思想家である。ウィトゲンシュタインの著作が、ウィトゲンシュタイン自身の意思に従って、英語圏ではドイツ語と英語が見開きで併記されて独英対訳本という体裁で出版されているのはよく知られている。ウィトゲンシュタインは、自分の著作が英語に翻訳されることで、ドイツ語の原文のもつニュアンスが失われてしまうことを恐れていた。自らの思想を言葉で表現しなければならない哲学者としてウィトゲンシュタインは、そのアカデミックなキャリアをイギリスのケンブリッジで送りつつも、自らの「母語」であるドイツ語にこだわっていたのである。彼が1930年ごろにケンブリッジの聴衆に向かって行ったとされる講演の原稿『倫理学講話』（ウィトゲンシュタイン：1965=1976、p.381）に、次のような言葉が残されている。

「英語はわたしの母語ではありません——したがって、難しい主題について語る際にはある種の正確さと微妙な言い回しがほしいのですが、それが私の表現には欠けていることが多い、ということでもあります。私にできることはただ皆様方に次のようをお願いすることだけです——すなわち、～略～、私の言おうとすることをつとめて理解していただきたい、～略～、

ということでもあります。」

『論理哲学論考』のウィトゲンシュタインは、言語に対する非常にストイックな態度によって、言葉に意味を確実に保証する見方を提案することを課題としている。その方法は、いわば線引きである。言語分析によって、ウィトゲンシュタインは言語が意味を持つための条件を定め、そのこちら側と向こう側の間に線を引く。私たちが線のこちら側に止まるためには、ウィトゲンシュタインの提案する言語の条件に従わなければならない。そして、言語の向こう側にある何かについて語ろうとしてはならない。言語の向こう側について語ろうとするならナンセンスに陥るからである。

「本書は思考に対して、限界を引く。～略～。限界の向こう側は、ただナンセンスなのである。」（ウィトゲンシュタイン：1922=2003、序文）

「語りえないものについては、沈黙しなければならない」（ウィトゲンシュタイン：上掲書、TLP 7）

ウィトゲンシュタインは、その上で、こうした言語に支えられた「生」の全体を、意味のあるものをして受け止める可能性を確保しようとしているのである。「『論考』（『論理哲学論考』）は「生の肯定」というモチーフのもと、虚構的表現だけでなく、価値的表現、「私」に関する表現までも、言語から排除するものであった。それは、「生」がナンセンスに陥ることのないような、簡素ではあるが実のある言語を提示しようとしたものと見なし得るだろう。」（吉田：2009 p.207）

言葉と生に意味を確保するためにウィトゲンシュタインがこだわったものは、実在すなわちリアリティである。ウィトゲンシュタインの努力は、言語をいかに実在（リアリティ）に則して用いるか、そのための条件を特定することに向けられている。意味のある世界とナンセンス

の世界の間の線引きは、言語が實在に則したものであるための条件を明らかにすることであり、ウィトゲンシュタインにとって言語哲学は、まさにそのための道具だったのである。

「『論考』の提案する言語論が現実主義（アクチュアリズム）・有限主義であることは、主体が實在（リアリティ）から離れてまったく勝手に言語を用いたり、新しい意義を任意に設定することを不可能にする。これは、「正しい」、すなわち現実の實在する（リアルな）世界に則した有意義な命題の構成による言語の使用と、「正しくない」、すなわち實在する（リアルな）世界を遊離したナンセンスな記号の構成を、明確に区別する視点を提供している。」（吉田、上掲書、p.111：丸括弧内は筆者補足）

ウィトゲンシュタインは、リアリティと切り離された、一貫性のないナンセンスな「言葉」（彼はそれを「言葉」とは認めないだろう）に振り回されることを最も恐れたのである。言葉にリアリティを確保しなければ、そもそも私の生を私の生として捉えることもできない。それでは、それを肯定することも否定することも、そもそも人生に意味をもたらすことなどできるはずもない。ウィトゲンシュタインによる言葉の意味としての實在へのこだわりは、アーレントによる母語の背後に伴われるべき自己の来歴へのこだわりと、ここにおいて響きあうのである。

その場の権力が言葉の意味を決めてしまうのであれば、言葉は、アイヒマンにとってと同様、自己を社会に合わせるための道具に過ぎなくなるだろう。自らの経験、来歴、そしてリアリティを離れ、権力者の設定した意味に自らを欺いて空疎に従うことになってしまう。これでは、言葉は自らの実際の経験、現実の生を表現しているとは言えない。だから、人生が意味を持ちうるなら、言葉は恣意的な社会的規約のみに基づくものであってはならない。言葉はリアリティに基づかなければならない。これが、ウィトゲ

ンシュタイン哲学の強い志向であり、危機に生きる私たちが立ち戻るべき地点であると私は思われる。

6. おわりに

ギデنزが指摘するように、現代を生きるわれわれは単に生命について恒常的な危険にさらされているだけでなく、生の意味においても存在論的な不安を受け止めて生きなければならない。そのための手がかりを、本稿では災害や亡命といった危機についてのソルニットやアーレントの言葉に求めた。

ソルニットが危機の中に見ようとした希望は、権力の仕掛けた幻想のリアリティからの解放であった。そうした幻想から解放されるや否や、人民は自分たちの置かれた境遇、周囲の状況というリアリティをしっかりと受け止め、自ら協力して新しい生活と生の意味を再生しはじめるというのが彼女の希望である。ただし、そうした生の意味はいつでもナンセンスに転化して、再び危機に陥る危険をはらんでいる。アーレントがアイヒマンに見たものは、こうした危機を招き寄せる態度であった。一見「言葉」のように見えるけれどじつはナンセンスであるような「決まり文句」を許容し、そうしたリアリティから遊離しに意味に見放された次元を生きる態度。そうした自分の生の意味を忘れ去った生き方が、他者と自らの生の意味に対して、最大の暴力や破局を招くとアーレントは指摘するのである。ウィトゲンシュタインの哲学的なプロジェクトもまた、こうした生の意味をめぐる文脈で、リアリティに則して言葉を用いるための努力として理解することができるだろう。

私たちの社会は変化するものであり、その中で営まれる私たちの生は、絶えず生命だけでなく生の意味の危機にさらされる。それは、特に現代社会において深刻化しているとはいえ、人間にとって避けられない宿命と言うほかない。本稿で取り上げた思想家たちの言葉に耳を傾けるなら、危機において私たちがリアリティへの

感覚を失ってしまわないことが、さらなる危機への落ち込みを避け、危機から生の意味を再生していくための条件であると受け止めるべきではないだろうか。

参考文献

- ・ベック (1986=1998):U. ベック (東・伊藤訳)、『危険社会』、法政大学出版局、1998年
- ・ベック (1994=1997):U. ベック (小幡正敏訳)、「政治の再創造——再帰的近代化理論に向けて——」(ベック・ギデンズ・ラッシュ:1994=1997、収録)
- ・ギデンズ (1994=1997):A. ギデンズ (松尾精文訳)「ポスト伝統社会に生きること」(ベック・ギデンズ・ラッシュ:1994=1997、収録)
- ・ラッシュ (1994=1997):S. ラッシュ (叶堂隆三訳)「再帰性とその分身——構造、美的原理、共同体——」(ベック・ギデンズ・ラッシュ:1994=1997、収録)
- ・ベック・ギデンズ・ラッシュ (1994=1997):U. ベック・A. ギデンズ・S. ラッシュ (松尾・小幡・叶堂訳)、『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理——』、而立書房、1997年
- ・ギデンズ (1991=2005):A. ギデンズ (秋吉・安藤・筒井訳)『モダニティと自己アイデンティティ』、ハーベスト社、2009年
- ・ソルニット (2009=2011):R. ソルニット (高月園子訳)『災害ユートピア——なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』、亜紀書房、2011年
- ・中川 (2009):中川敏『言語ゲームが世界を創る——人類学と科学——』世界思想社、2009年
- ・柴田ほか (2014):柴田邦臣・吉田寛・服部哲・松本早野香『「思い出」をつなぐネットワーク——日本社会情報学会・災害情報支援チームの挑戦』昭和堂、2014年
- ・服部 (2014):服部哲「情報通信技術を活用した地域コミュニティ再生の挑戦」、『社会情報学 2巻3号』社会情報学会 (SSI)、2014年 (掲載決定)
- ・アーレント (1994=2002):H. アーレント (山田正行訳)「何が残った? 母語が残った」『アーレント政治思想集成I』みすず書房、J. コーン編 (齊藤・山田・矢野訳)
- ・飯島 (2013):飯島洋一『破局論』青土社、2013年
- ・アーレント (1963=1969):H. アーレント (大久保和郎訳)『イェルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告』、みすず書房、1969年
- ・ウイトゲンシュタイン (1922=2003):L. ウイトゲンシュタイン (野矢茂樹訳)『論理哲学論考』岩波書店、2003年 (引用は、「序文」、本書独自の番号付けを「TLP xx」などの形で指示する)
- ・ウイトゲンシュタイン (1965=1976):L. ウイトゲンシュタイン (松下隆英訳)「倫理学講話」(『ウイトゲンシュタイン全集5』大修館、1976年)
- ・吉田 (2009):吉田寛『ウイトゲンシュタインの「はしご」——『論考』における「像の理論」と「生の問題』』、ナカニシヤ出版、2009年

注

1. ソルニットの「災害ユートピア」、アーレントの「母語」をめぐる考察については、拙著『「思い出」をつなぐネットワーク 日本社会情報学会・災害情報支援チームの挑戦』(昭和堂)第5章第1節において、東日本大震災における被災写真救済プロジェクト「思い出サルベージアルバム・オンライン」の活動に内在的な観点から、より詳細に分析しなおした。ここでは、同じ手がかりと用いつつも、「危機と言葉」という一般的な観点をもって、危機に際して生の意味を守

ることに焦点を当てて検討したい。

2. ベック (1986=1998) は、近代化に伴う科学技術や社会制度の発達、危険を目に見えない形で増大させていると指摘している。私が列挙したのは、そうした事例の現代版である。ベックの著書はチェルノブイリの事故の直後に出版されたが、同質的な、あるいはさらに困難な状況が、日本という世界で最も発達した科学技術と経済力を備える社会で、東日本大震災として再現されたのである。
3. ギデンズ (1991=2005、pp.52-60) は、存在論的安心に関わる問題として、1：自らが存在することの不条理を問う実存それ自体の問題、2：自らに必ず到来する死を受け止めなければならないという生の問題、3：私と同等のしかし私自身ではない存在としての他者の問題、そして4：自分が何者であるのかに関わる自己アイデンティティの問題に区別する。ギデンズが社会学者として主として取り組んでいるのは、4の自己アイデンティティの問題である。本稿の焦点はむしろ、1の存在に関わる論点にある。
4. ある一定の範囲のまとまりをもつ社会における生活の全体を「言語ゲーム」として描き出す具体的な試みについては、人類学者である中川敏の『言語ゲームが世界を創る——人類学と科学——』（世界思想社）を参照されたい。
5. アイヒマンは、第三帝国において、ユダヤ人を中心に数百万の人々を強制収容所へ移送し、ユダヤ人に悪魔のように恐れられた。戦後アルゼンチンで逃亡生活を送っていたところを発見され、イスラエルで裁判にかけられ1962年に絞首刑にされた。アーレントは、このアイヒマン裁判を「悪の陳腐さについての報告」として、アイヒマンが私たちと変わらないごく小さな平凡な官吏にすぎなかったことを描き出し、ナチスをあり得ないほどの「悪」として弾劾する「正義」の危うさについて批判的な論点を提示

した。(アーレント：1963=1969)

(受付日：2013年9月25日)